

天びん秤や計量カップなど

多楽島出身の富山 清人さん

富山清人さんは多楽島の蒲原磯で、お父さんの富山清次郎さん、お母さんのイトさん、弟さんとの四人暮らしで、根室にもお姉さん夫婦やお兄さん、二人の妹さんが暮らしていました。家業は漁業で蒲原磯では主にコンブ採りやヨード、カリの製造、仲買をしており、春から年明けぐらいまでを島で過ごし、年明けから春までは根室で暮らしていました。



天びん秤は、ヨードを作るためのマンガンを計る秤、計量カップは硫酸を計るもの、そのほか鞆やランプ、桶、犬の毛皮のチョッキなど昭和二十年十二月の脱出時に持ち帰ったものです。戦争の末期、アメリカの潜水艦が出没するということで沖に出る漁はできず、主に中国に輸出していたコンブの出荷もままならなくなつたため、沿岸でできるアブラコ釣りをすることになったそうです。

ところがアブラコ釣りの資材が不足していたことから、代表してお父さんと清人さんが資材を調達するため根室に出たのですが、そこで根室空襲に遭い、お父さんや根室に住んでいたお姉さんなどを亡くされました。

根室が一面焼け野原と化したため、根室に居たお姉さんの子どもと妹たちを連れ、島に帰ります。がすぐにソ連軍が侵攻してきたことから集落の人々は次々に脱出していきましました。清人さんも脱出を考えましたが、これからの生活を考え、売り物となるヨード、カリを生産してからの脱出となりました。

秤などは、根室に持つてきても役に立たないことはわかっていたましたが、大事に使っていた品々を置いていくことはできなかつたそうです。今では島での暮らしを偲ぶとても大事なものだ大切なにしてらっしゃいます。



アザラシ皮のトランク

〽 碓氷 ミナ子さん (根室市在住) 〽



碓氷ミナ子さんの自宅の蔵にはアザラシの毛皮のトランクが眠っています。

これは、いつ誰からもらったものかは定かではありませんが、島の人からもらったものだとは碓氷さんは当時を振り返ります。トランクの中には昭和二十三年の新聞が入っており、おそらくもらったのはそれ以前ではないかと考えられます。碓氷さんが小さい頃にこの毛皮のトランクを見た時には「気持ち悪いなあ」と思ったと笑いながら話されていました。

当時、動物の毛皮は生活に利用することが多く、碓氷さんの家にはなかったようですが、島の人達は自分でラッコを取ってその皮をなめし、チョッキを作って寒さを凌いでいたそうです。

どんざのジャケットや産着など

く 国後島出身の佐藤 明子さんく

佐藤明子さん一家は国後島泊村に住んでいました。お父さんの石田正彦さんは郵便局に勤めていたそうです。長女の明子さんを含むきょうだいは当時三人で、お母さんの萩さん、そしてお爺さん、お婆さんの七人家族で、明子さんは終戦当時四歳だったそうです。



お父さんの実のお母さんである文さんは、二十五歳で亡くなり、お爺さんはその後きくさんと再婚されたそうです。

このどんざは、仕事を終えたお爺さんが家に帰ってくつろいでいる時に羽織っていたものだと思います。二枚の生地を組み合わせて作られているため重いのですが、丈夫で暖かいそうです。明子さんは、手の込んだ作りであるため、どういう想いで作られたのかを考えると感慨深いものがあるそうで、このどんざをジャケット風に仕立て直して、現在も愛用しているそうです。

ソ連軍が侵攻してきた際はロシア兵が島に上陸してきたことを回覧版で知り、根室までチャーターした船で脱出したそうです。お父さんとお爺さんは、女性と子供を先に脱出させたいという想いで島に残り、明子さんきょうだいやお母さん、おばあさんを先に島から送り出したそうです。



どんぐりのジャケットや産着など（その二）

国後島出身の佐藤 明子さん

産着は、当時十八歳だった文さんが長男の正彦さんのために作ったそうです。産着全体には松の絵が描かれていて、袖は無双袖、背中には手づくりで作られた布袋様のお守りが縫い付けられており、正彦さんの健やかな成長を祈る文さんの気持ち伝わってきます。明子さんはおっしゃっています。

丸帯は、苔色、金色のおりが入ったものですが、お婆さんの文さんが結婚式を挙げた時に締めていた帯ではないかということですが。



このほかにも、お婆さんの文さんが書かれたものと思われる木札があります。その木札には「北海道千島国 泊村西通一番地 公立 国後尋常小学校 石田正彦」と書かれていてお父さんの正彦さんが小学校に上がる時に持たされたものと聞いているそうです。

お爺さんは、お婆さんの文さんにまつわるこれらの品々を生涯大事に保管されていたそうで、明子さんはお爺さんの文さんへの強い愛情を感じると話されていました。

さらに、お爺さんが作ったと思われるこげ茶色の木の葛籠（つづら）箱があります。蓋の裏には「日露戦争を勝った記念に」と書かれています。（日露戦争が終わったのは明治三十八年）明子さんは、キャスターを取り付け、現在も使用しているそうです。これらの物については、今も大切な思い出の品として保管されています。



ヒグマ皮の敷物

志発島出身の白田 春美さん

白田春美さんは、志発島の本モシリに住み、お父さんの勇次郎さん、お母さん、男三兄弟の五人家族で家業はコンブ漁を行っていました。



「国後島にはこんなに大きな熊もいたんだ」この熊の敷物は、三男の誠治さんが国後島の人から譲り受け、保管していたもので、爪や顔もしっかり残っていてとても迫力があります。熊のチョッキは誠治さんが譲り受けた毛皮から作ったもので、ずいぶんお金がかかったと笑いながら話してくださいました。熊の毛皮のチョッキということです。

昭和二十年九月初め頃、ソ連軍が島に侵攻してきて、何をされるかわからないという怖さに島民の方々は次々と島を脱出していきました。白田さんのうちにも発動機船があり脱出することは可能でしたが、その頃お父さんが兵隊に行っていて島にいなかったため、逃げるわけにはいきませんでした。その後、お父さんは島から脱出した人たちが財産を取りに戻る船に便乗して帰り、十月頃に島から脱出を図りますが、ソ連兵に見つかり拿捕されてしまいます。お父さんは択捉島に、春美さん達は相泊に連れて行かれました。相泊では、特に取り調べ等もなく二日後に解放されましたが、お父さんは択捉島でサケやマスの燻製を作らされ、遡上が終わった十一月頃に戻ってきました。しかし、白田さんの船はソ連に没収されていたため、脱出することはできず、結局、昭和二十三年に樺太經由で根室に引き揚げてきました。



お母さんの帯

〱 択捉島出身の長谷川 ヨイさん 〱

長谷川ヨイさんは、択捉島の留別村入里節生まれで、お父さんの怡吉さん、お母さんのミヨさん、きょうだいは八人で、長男と次男以外の家族九人でコンブやノリを採って生活していました。

この帯はお母さんのミヨさんのもので、いつも着物姿でとても明るく優しい人だったそうです。が、引き揚げ当時は体調を崩し、ほぼ寝たきりだったので、ヨイさんはお母さんが日本までもたないのではないかと、とても心配だったそうです。お母さんは引き揚げ後に体調が回復し、昭和五十七年に八十四歳で亡くなるまでお元気で、そのお母さんの大切な思い出の品だとのこと。



貴重なお父さんと
お母さんの写真
(昭和10年頃)
引き揚げ時は写真等
を持ち出せませんでした
が、親戚の家にもら
ったものでした



ソ連軍が上陸してきた時は、ソ連軍が上陸してくるから夜になって家のカートンを閉めないようにと通知がきていたそうです。最初は留別に上陸し山を通って内保に、そして入里節までやってきました。言葉も通じませんし、銃を何度も撃ってきて恐ろしかったそうです。ソ連軍が家に土足で入り、タンスを勝手にひっくり返して部屋を調べ、時計などの物をくれと言ってきました。お父さんが、家に入ってきたロシア兵に銃を突きつけられながらも、お姉さんをかばったこともあったということです。引き揚げは昭和二十二年八月でした。ある日突然、引き揚げるから今すぐ内保まで来いと言われ、荷造りをしていく余裕もなく食べ物しか持ち出せませんでした。まずは内保に集められ、神居古丹に移動して樺太経由で引き揚げてきました。ヨイさんは、樺太での生活は惨めだったと振り返ります。一畳間ほどの部屋に家族七人で収容され、横にもなれない生活が一ヶ月ほど続き、日本の赤十字の船が迎えに来たときは子どもも大人も日本に帰れるんだと泣いていたそうです。

足踏みミシン

〽 択捉島出身の小川 幸子さん 〽

小川幸子さん一家は、択捉島薬取村に住んでいました。お父さんの臼井義雄さんは薬取の水産孵化場の場長をされていて、お母さんの八重さん、五人きょうだいの末娘の幸子さんの七人家族でした。

このミシンは、お母さんが紗那からお嫁にきたときに嫁入り道具として持ってきたもので、とても大切にされており、家族の服などを手作りしていたほかロシア人から頼まれて軍服やドレスなども作っていたそうです。



引き揚げの際には、バラバラに分解し布団にくるんで持ってきたとのこと。お母さんは平成十四年に亡くなりましたが、亡くなる十年くらい前までは大切にこのミシンを使われていたそう。幸子さんの学芸会用の衣装や高校の時の制服をつくってくれたことなどが大切な思い出だとお聞きしています。

幸子さんは生まれたばかりだったため、島での記憶はないそうですが、お姉さんに聞いた話によると、昭和二十年の引き揚げ時にはソ連側から、お父さんだけは残れと指示されたそうです。

しかし、幸子さんの自宅で同居していたソ連の将校が、上部に掛け合ってくれ、一緒に引き揚げることができたそうです。

引き揚げ当日は霧が出ていたそうですが、遅れて引き揚げを認められたお父さんが、白い馬にまたがって霧の中から港に着いたときには、近所の皆さんも一緒に喜んでくださったそうです。



お母さんの作ってくれた服を着る小学生の頃の小川さん

